

会報

58号

# 会報

函館の歴史的風土を守る会会報  
 No.58 H10. 4. 1  
 発行所 函館の歴史的風土を守る会  
 事務局 函館市五稜郭町43-9  
 五稜郭タワー株式会社（両角）  
 電話(0138)51-4785  
 印刷所 (有)三和印刷 電話 45-0845



## ごあいさつ

’98実行委員長 和泉雄三

歴風会の20周年記念のパーティーには驚きました。指定された時間に行くと、どこもかしこも参加する人でいっぱい。

兵島会長夫人の話では「300人を超えました」。せいぜい100人も来るかなと予想していた私、啞然。

大体、市民運動で始まった「歴史的風土を守る会」、もし、その趣旨で首尾一貫していたら、もう、とっくに潰れていたと思います。

市民運動というのは、いわば国家権力との闘い、民主主義運動の一つ。10年も持てば大したもの。5年で疲れてしまい、とてもそれ以上はやっておれません。

それが、20年後の祝賀会に300人も集ってくれた。次々と新しい人が入って交代してくれたのに違いありません。

事実、中に入ってみると、大部分、知らない人ばかりでした。

私、びっくりすると共に、この20年間の「歴風会」を守り育ててくれた人々に、心から敬意を表したいと存じます。

ホントにおめでとう。立派にやってくれました。

今や、函館は小樽と共に、市民運動のメッカ、そして、文化活動の盛んな地域になりました。

「歴風会」は、今では市民運動と共に文化活動の中心の一つなのです。

## お礼の言葉

函館の歴史的風土を守る会々長 浜島国四郎

本日は、ご参会頂きましたこと先ずもってお礼を申し上げます。

ご存知の通り歴風会が1978年4月に、旧北海道函館支庁庁舎の開拓の村への移転の話が出た時「あるべき所にあつてこそ」と市民の思いを結集し、現地保存を訴え実現させたグループを母体に生まれ、この4月で20周年になります。この節目に当たり、私達の大好きな函館に生きた先輩達の生き様に思いを馳せて、当時の代表者だった和泉雄三先生、田尻聡子さんを正副実行委員長に迎え、木戸浦市長、石井市議会議長をはじめ、各報道機関、当パーティーの歴代正副実行委員長、歴風文化賞受賞者の方々、そして沢山の皆様のご協力を頂き、恒例のチャリティー・パーティーを盛大裡に終了出来ましたことを改めて心からお礼申し上げます。

昨今の一段と厳しい環境の中で、チャリティーの景品をご提供いただきました皆様には厚く御礼申し上げます。

尚、本年6月初旬、歴風会の20年の歩みを振り返る集いを企画いたして居ります。改めてご案内申し上げますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## 原風景宣言

本年度、遠足や花見などで広く市民に親しまれてきた「赤川水源池」（笹流ダム）を原風景とした。  
（宣言文省略）



笹流ダム

## 保存建築物

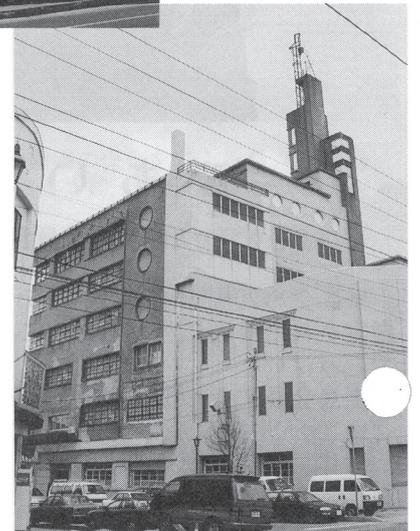
### 歴風文化賞団体



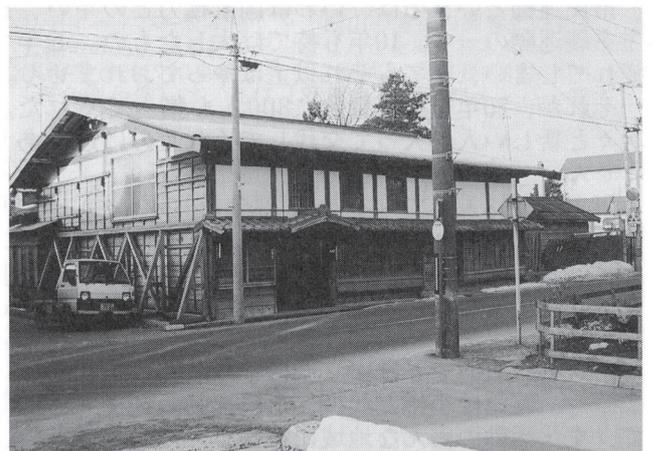
函館元町チャーチフェスティバル  
実行委員会



弘前屋商店



▶ 尼崎製缶(株)函館工場  
(旧金森屋百貨店)



熊谷邸（上磯町）

### 歴風文化賞選考基準

- ① 建造物自体の貴重性。
- ② 持ち主が長年保存への努力を続けている。
- ③ 景観への寄与。
- ④ 歴史性。
- ⑤ 地域の町並みや社会全般へ波及効果大きい。
- ⑥ 諸々の制約の中で創意工夫が顕著である。

# 協賛商社のみなさまありがとうございました

チャリティーパーティーの御協力商社尊名

- ・サッポロウエシマコーヒー(株)函館支店・(株)五島軒・大槻食材(株)・(株)第一食品・文雅堂・平方亮三（版画家）
  - ・ガスコープ(株)・カメラのたねざわ・(株)カネマル・北海道コカ・コーラボトリング(株)函館万代営業所
  - ・(株)不二屋本店・(有)山田万年堂・(株)魚長食品・カルチャースクール・和泉雄三・(株)カメラのニセコ
  - ・カメラのタケダ・函館山ロープウェイ・五稜郭タワー(株)・尼ヶ製缶(株)・柳沢 勝・宮腰善行・(有)三和印刷
- （順不同・敬称略）



和泉実行委員長挨拶



浜島会長挨拶



木戸浦市長祝辞



受賞風景



熊谷氏謝辞



受付スナップ



石塚さん宣言文朗読

## 《第5回 開港5都市景観会議》

# 横浜大会に出席して

秋元裕志

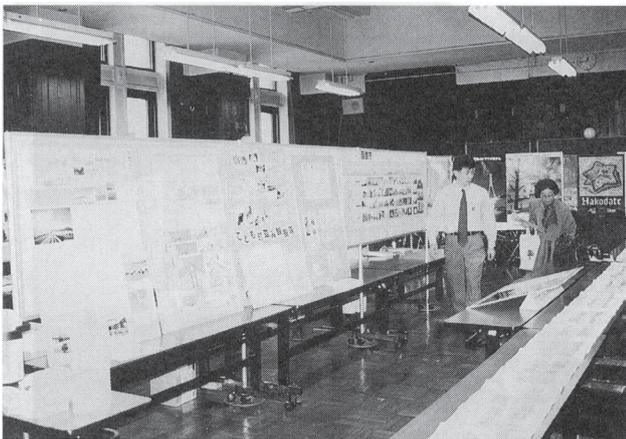
（函館市都市建設部都市デザイン課）

安政5年（1858）、日米修好通商条約が締結され、函館・横浜・新潟・神戸・長崎の5港が開港された。この共通の歴史を持つことを縁に、5都市において活動している市民団体が一同に会し、交流や意見交換等をする場として、平成5年から「開港5都市景観会議」が毎年1回開催されている。神戸から始まり、長崎・新潟・函館と続き、当地横浜において第5回の開催を迎えた。

横浜大会は、平成9年10月31日から11月2日までの3日間の日程で横浜市開港記念会館、県立歴史博物館等の横浜市内の会場において開催され、3日間とも晴天に恵まれた。

1日目の全体会議は、開港50周年を記念して、すべて市民の寄附金によって大正6年に竣工した、横浜市民の殿堂である横浜市開港記念会館を会場に、横浜大会実行委員会会長の挨拶を以て始まり、横浜港見学を挟み同会場でシンポジウムが行われた。高秀横浜市長と荻野アンナ氏の対談があり、また各都市代表者が各都市の文化について討議した。

2日目は、市内の各会場において5つの分科会が開



パネル展

催され、函館からは全ての分科会に参加した。

分科会「歴史的資産の保存・活用」では、函館からは函館の歴史的風土を守る会の浜島國四郎氏、函館市伝統的建造物群保存会の中村光一氏および函館市都市



開会式風景

建設部都市デザイン課秋元裕志が参加した。

函館の歴史的風土を守る会の浜島國四郎氏が函館の建築の保存・活用について函館の現状をスライドで報告し、函館に建造物を保存することを目的とした市民団体の「函館の歴史的風土を守る会」が盛んに活動していることを参加者から賞賛された。

また、建築物の保存についての意見として、「建物の保存については、市民の気運の盛り上がり力となる」、「自分の住んでいる地域にプライドを持つことが大切である」などの意見が出され、熱い論議が展開された。

分科会「成長する開港都市」では、函館からは函館デザイン協議会大塚直記氏が参加し、各都市共通の歴史的建造物を生かしたまちづくりの今後の課題として、「観光だけで終わってはいけない」、「地域住民のためのまちづくりであることが重要」および「観光は、まちづくりとどのように協調できるか」などの意見が出された。

分科会「外国文化が生きる街」では、函館から函館の歴史的風土を守る会の田尻聡子氏、元町倶楽部の村岡武司氏が参加した。

開港5都市が国際化にどう寄与するかについて意見交換し、「ともに文化を育て地域住民にやさしいコミュニティづくりが必要である」および「メルティングポットではなく、サラダボールのような素材を生かし、ドレッシングで素材の良さを醸し出す」などの意見が出された。

分科会「街づくりのシステム」では、函館から函館歴史的風土を守る会の加賀谷京子氏、函館松陰地区商店街振興会の石黒哲三氏が参加し、横浜の5つの商店街を視察して各都市の課題について討議した。

その課題としては、「行政と市民の共通のビジョンをもつこと」、「国際化により文化の混在を融合させなければ、国際化にならない」および「都心商店街が生き残るためのテーマを見つける」などの意見が出され、商店街をテーマにした初めての試みであったため参加者は大いに参考になった。

分科会「開港都市の生活文化」では、函館から函館の歴史的風土を守る会の浜島良子氏および佐々木正子氏が参加し、各都市の生活文化について、「外国人と言わない」、「日常的なつき合いをしている」、「函館は、然の良港であり、大火があっても文化を守ってきた」、「各都市で外国文化との接し方は異なっている」、「長崎の御くんちは、徳川幕府が民のキリスト教への関心をそぐために開催したと言われている」、「知らない事を学ぶ熱心さが、外国文化を受け入れてきた」および「女子への教育の歴史を見るとキリスト教の布教の熱心さを、女子への教育に換え日本に女子高等学校を創設した。それまでの日本の教育は男子のみの教育制度であった」などの意見が出され、開港都市の文化は女性が支えているという結論になった。

3日目は、横浜市開港記念会館を会場として締め括りの全体会議において、各分科会からの報告がなされ、これに引き続いて「今後この会議が景観の切り口にと



大会宣言文

どまらず、まちづくりを考え実践する多くの市民団体をリードする存在になるよう努力するとともに、各都市で固有の歴史を大切に、個性あるまちづくりを、自ら主体的に実践していく」との大会アピールが宣言され、最後に次期開催地である神戸の代表者が歓迎する旨の挨拶を行い、開港5都市の市民団体の意識と連帯を深めた開港5都市景観会議横浜大会は閉幕した。

おわりに、横浜大会を運営された横浜市の市民団体の熱意と御尽力に対し深く感謝の意を表したいと思います。

〔函館からの参加者〕

- |                  |        |
|------------------|--------|
| ・函館の歴史的風土を守る会    | 浜島 國四郎 |
|                  | 田尻 聡子  |
|                  | 加賀谷 京子 |
|                  | 浜島 良子  |
|                  | 佐々木 正子 |
| ・函館市伝統的建造物群保存会   | 中村 光一  |
| ・元町倶楽部           | 村岡 武司  |
| ・函館デザイン協議会       | 大塚 直記  |
| ・函館市松陰地区商店街振興会   | 石黒 哲三  |
| ・函館市都市建設部都市デザイン課 | 秋元 裕志  |

## 《緊急 鞆の浦港架橋・埋め立て問題によせて》

（鞆の浦海の子）

代表 松居 秀子

鞆の歴史的港湾保存問題も、他の保存運動と例外なく理不尽な経緯をたどりつつ、1893年10月、福山港地方港湾審議会の計画・承認して以来、14年経過しました。ところが、私たち一般の住民がこの計画を知るところとなり、行動をおこしたのは今より4～5年前からです。現在、推進の立場と反対の立場と住民が2つに割れた状況の中、世論とは関係なく審議会のみが進行していております。しかし、それでも未だ予算計上なく、実施されずにいることは幸運なことです。

### 〈鞆の歴史〉

いにしへの鞆は山裾の狭い土地と7つの島から出来ていました。島かげに舟を泊めたのは縄文か弥生でしょうか…。やがて島々は陸続きになり、天然の良港になりました。その上、紀伊水道と豊後水道の東西両側から流れ込んだ潮がぶつかりあう瀬戸内海の中央に位置し、「潮待ちの要津」として古代以来栄えてきました。

大伴旅人が、730年、太宰府から都に帰る途中に詠んだ和歌、「吾妹子が見し鞆の浦の室の木は常世にあれど見し人ぞなき」、他に7首、万葉集に詠まれています。又、毛利元就の時代の「山中鹿之助の首塚」、南北朝時代の古戦場跡、鞆に興り鞆に滅んだ足利氏、江戸時代、朝鮮通信使が立ち寄った対潮楼（福善寺）、幕末、三条実美ら7人の公卿が長州に下る時立ち寄った「七卿落遺跡」（国の重要文化財となり、5～7年かけて修復中）、坂本竜馬のいろは丸沈没の折、紀州藩との交渉に使われた商家、隠れ屋敷が現存等々、明治時代に至るまで鞆の浦は「潮待ちの港町」として度々歴史に登場してきます。その上、北前船なども立ち寄る商港としても繁栄したため、港を取り囲むように商家、蔵の町並みが出来、又、朝鮮通信使・李邦彦をして「日東第一景勝」と賞されるほどの風光明媚がさらに人の往来を多くし、現在でも19の寺をようし、国・

県・市指定の文化財が40ほども残されている町であります。このように、鞆の町を語るに港抜きでは語れません。鞆の根幹を成しているのです。

### 〈鞆港の歴史的土木遺産〉

鞆港は特に江戸時代、福山藩により1791年（寛政3年）築造された大波止、1811年（文化8年）船の接岸荷役が潮の干満に関係なく出来るようにするために築造された大雁木、1859年（安政6年）現代の燈台の役目をする鞆燈籠塔（常夜燈）-現存するものとしては

日本一の高さ-、1791年（寛政3年）江戸期のドックである焚場が築造される-1997年（平成7年）2月11日、発掘される-

石造りの波止場、雁木、常夜燈、焚場の4点がセットで現存するのは、日本で唯一鞆港だけです。

### 〈鞆の浦海の子の町づくりのビジョン〉

私たち鞆の住民は、この港で育まれてきました。あさを掘り、魚釣りをし、泳ぎと、港の

中是我们たちにとっては生活の場でもあり、遊びの場もあったのです。そして、形は変われど、現在も日の出から日の入りまで、漁船や夕涼みと憩いの場所となっております。昔のような賑わいこそないものの、港は確かに今も私たちの生活に欠かせない存在であることを、私たち住民は忘れてはいません。

とかく、マスコミ等では景観論争が強調されがちですが、私たち鞆の住民にとっては生活論争でもあるのです。その“景観”は、その地域の生活・風土を作る大きな要因です。景観が変われば、昔から連綿と作り上げられてきた町の生活・風土は変わってきます。

今、行政により推し進められようとしている「鞆港埋め立て・架橋」は、鞆の利便性、発展、活性化、交通渋滞、過疎化解消、観光客の増加を最大の理由にあげていますが、これらの一つずつ検討しましても、何の具体的な根拠は見つかりません。この計画を強引に



地図

推し進めることは歴史的景観はもちろんのこと、私たちの日々の生活自体を破壊し、いずれは風土をも破壊してゆくものです。つまり、「鞆が鞆でなくなってゆく」ことなのです。私たちはこのことを一番恐れます。鞆に必要なのは、「鞆港埋め立て・架橋」ではなく、立ち遅れた下水道整備であり、防災対策、空家対策等、生活環境の改善整備なのです。

〈運動展開〉

1993年2月、地元の町興しグループの「鞆を愛する会」により、県知事に「山側トンネル案」が代替案として提出されました。しかし、「地元メリットが少ない」と、ほとんど検討されることもありませんでした。力のない一住民には署名を取るしかない、署名を集め始めました。「鞆の人たちが、こんな故郷を壊すはずがない」と、毎晩仕事を終えてから一軒一軒説明をしてまわったのです。結果は意外なものでした。

「行政に反対するようなことはできない」

「煩わしいことに巻き込まれたくない」

「よくわからない」

等々、先人から当然の如く受け継がれ、当たり前にある港町の日常は、鞆港の歴史的な存在意義など鞆の人たちに考えさせたこともなく、考えようもしないのです。どこの町にもありますように、未来へのたくましい想像する町づくりよりも、目先の利潤、しがらみの中での判断へと人々は行ってしまいます。それでも諦めず署名を取り続けています。全国各地から、又、日本美術家協会、各歴史研究会からも暖かい声援を頂き、



平拓予定地

7千名余の署名を1993年10月に福山市長に提出しました。後に筑紫哲也さんの番組で、「平山郁夫さんとの対談」の中、署名用紙を渡す場面と共に「鞆港架橋・埋め立て問題」が紹介されました。この他、絵馬、写真で見る「鞆再見展」のチャリティー作品展、鞆の歴史をめぐるウォークラリー、港広場での写生大会、バザー・リサイクル展等、ソフトの面からも鞆の人たち

にもう一度自分たちの町を見つめ直してもらおうと、イベントを行ってきましたが、1996年（今年度）の予算に港が組み込まれるのではないかとという緊張感の中、2月から3月にかけて、各新聞社が競って特別キャン



往時の面影をとどめる港

ペーンを展開、私たち「海の子」のメンバーも、朝日新聞社の田井中記者と同行、一週間東京に滞在して太田博太郎先生、稲垣栄三先生、平山郁夫先生、大林監督、池田武邦先生（日本設計協会会長）、ナンシー・フィンレイさん、前野先生、永久庵氏等、8人の方々にインタビューしてまわりました。結局は予算がつかず、県から市へ「鞆のマスタープラン作り」が宿題として課せられたのです。

〈現況〉

早速、市行政は鞆のマスタープラン委員会を設置、3回の会合をもってプラン作成を終えました。その内容は「推進する人たちの推進するための推進する案」であります。その結果、「鞆港を埋め立て架橋」するために「重伝建」に取り組む、しかもその行政の窓口で埋め立て・架橋を推進する町内連合会をあてるといった、非常に異常な現在の鞆の町の複雑な状況になっております。

〈結び〉

このような混乱の中、「全国町並み保存連盟」と出会いました。今まで何も知らず、がむしゃらにやってきた4年をもう一度振り返り、連盟の方々の暖かい支援と指導を受けながら、頑張っただけでゆきたいと思いません。最後に、この計画をお母さんから聞いた高校生が、お母さんに言いました。「お母さん、港を埋めたら僕らのふる里がなくなるがー!!」、この言葉が全てを語っていると思います。私たち大人は、この言葉を謙虚に受け止めねばなりません。そして未来の子らに、何を残し伝承してゆくか、ゆけるのか、今を生きる一人一人の大人の責任だと考えます。

